慶應義塾大学学術情報リポジトリ Keio Associated Repository of Academic resouces

| Title | 現代医療と「戦後」世界に関する社会思想史的・社会史的考察 | | | | | |
|------------------|--|--|--|--|--|--|
| Sub Title | A study on contemporary medical treatment and 'postwar' world from the perspectives of the | | | | | |
| | history of social thought and social history | | | | | |
| Author | 高草木, 光一(Takakusagi, Koichi) | | | | | |
| Publisher | · · · · · · · · · · · · · · · · · · · | | | | | |
| Publication year | 2020 | | | | | |
| Jtitle | 学事振興資金研究成果実績報告書 (2019.) | | | | | |
| JaLC DOI | | | | | | |
| Abstract | 1968年は、世界的な現境で著者を中心とした異葉神立運動が起こった年として記憶される。ここに大きな時代の転換点があり、「繁栄の陰の薬民」という現象がグローバルにかつ巧妙に展開する出発点であったと捉えることができる。本年度の共同研究では、この視点に立って、ハーヴァード大学研究出が「認死」基準を発表したこと、日本で都市計画法が成立したことの二つに着目した。 1968年に発表された「認死」基準が、農器移植という外的な目的のために策定(捏造)されたことは、既に歴史が証明している。その「脳死」の正当化のために当初用いられた「自己決定権」が形成されることになった。この権利に基づくとされる「安死"、尊厳死」は、オランダやベルギー等では、「生きるに値しない生命」の社会の追別の論理に転化してしまっているとのカララクリがある。しかし、これを指導しただけでは、「安冻死・尊厳死」は、オランダやベルギー等では、「生きるに値しない生命」の社会の追別の論理に転化してしまっているというカラクリがある。しかし、これを指導しただけでは、「安冻死・尊厳死」は気がするとしたっそれは、息を見かした。1930年代のフッサールやホウイトヘッドらの近代的知道ではならない。 東京の編集で「いのち」の現場でとまどう一箇床医学気は論議集」(岩波書店)では、終末期医療の現場での「オーブン・ダイアローグ」や「オガテイブ・ケイパビリティー」に着目した。それは、息を良かには、1930年代のフッサールやホウイトヘッドらの近代代的知道する批判と1968年の異議中立運動を現代が問題のなかて結びつけ直さことにつながる。このような視点から、思想分野における「老年学」創成の意識と可能性を論じた。 いコぼう、1960年代の日本では、高度経済成長のひずみとしての、都市問題や公書問題への関心が高まり、国家は対応を取ることを余儀なくされた。都市問題に関しては、1968年に始末計画法がつの結節点を形成している。注意目前に始まずない。これの若に問題、都市で近く、1964年の調査・第二体(長ののするとしての、都市問題・公音景を考えれば、この都市問題に対している。従来の研究では、部市部種種の男をたっていくことに対する与覚白だ気の危機志こでがすらしたの事を完めたのとしたのの。従来の研究では、こち取るととた気が、長谷川は、The political motivations for the reform of urban policy during the ravig tage 大き こした そき いた ことに対する与空 たらし、それてきたが、長谷川は、The political motivations for the reform of urban policy during the ravig tage たてもの。近れの研究では、部市部を打撃した気のの様 電気の元 あっ近れのの手を重視していたことを明らかにし、その複雑さの一端をした。 今後は、戦後世界におわる医学である。 The year 1968 is recognized as a turning point in the contemporary history: a wave of protest movements led by youth erupted na page as a citage to be soliton criterion of brain death was actually fabricated to enable organ transplantation. The 'right of self-determination' to prosperth、Our bage Science of a bandoned peore as the underside of prosperth, Our project has forces of not be a significant events that occurred in 1968: the announcement of the decision criterion of brain death by the research group at the Harvard University and the enactement of Japan's City Planning Law. The above-mentioned decision criterion of brain death and the right of self-determination' to justify | | | | | |

social thought. In the 1960s Japan, urban and pollution problems attracted considerable attention and the State was forced to take measures. Following the enactment of the City Planning Law in 1968, urban policy became a prominent issue in that year's House of Councillors election. The City Planning Law should certainly be regarded as a nodal point against the backdrop of the Agricultural Basic Law enacted in 1961 and the outbreak of Sanrizuka Struggle in 1966. However, a detailed examination would present rather complicated state of affairs. Scholars have regarded the ruling conservative party's fear of a threat to its hegemony as the primary force driving this increased attention to urban policy. Hasegawa, in his article, examined the political factors surrounding the reforms enacted, concluding that politicians actually underestimated the degree of public interest in urban policy and made largely empty political gestures to appease urban dwellers while responding more readily to agricultural interests. We intend to continue our quest for a comprehensive understanding of the two currents of problems in the postwar world; the medical and bioethical problems on the one hand and the urban and pollution problems on the other. Notes Genre Research Paper URL https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=2019000008-20190340

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2019 年度 学事振興資金(共同研究)研究成果実績報告書

| 2019 - | 牛皮 字 | 事振興貸金(共 | 同研究) | 研究成果実績報告書 | 20 | 20 0 /, | 1 10 |
|---|---|--|--|--|---|---|-------------|
| 研究代表者 | 所属 | 経済学部 | 職名 | 教授 | ── 補助額 | 1 500 | ŦP |
| | 氏名 | 高草木 光一 | 氏名(英語) | Koichi Takakusagi | | 1,500 | ΤI |
| | | 布 | F <mark>究課題(</mark> 日本語 | 語) | | | |
| 見代医療と「戦 | 後」世界に関す | る社会思想史的・社会史的孝 | 寄察 | | | | |
| | | ; | 研究課題(英訴 | 1) | | | |
| A study on con history | ntemporary me | dical treatment and 'postwa | r'world from t | he perspectives of the history | of social thou | ught and s | socia |
| | | | 研究組織 | | | | |
| 氏 | 名 Name | | 所属・学科・ | 職名 Affiliation, department, an | d position | | |
| | Koichi Takakusa | - | | | | | |
| 支合川淳一(J | lunichi Hasegav | | 在空中日本体 | | | | |
| | | | 研究成果実績の | ノ城安 Fとして記憶される。ここに大き | | | |
| 問題の解決に 高草木の編著 や「ネガティブ・ 北1968 年 学」創成の意 ま いつ ま う 、 1968 を よ く され。 こ 、 1968 を よ く され。 こ 、 1968 を で 、 1968 を で 、 1968 を で 、 1968 を で 、 1968 を で 、 1968 を で 、 1968 を の 高 で 、 1968 を の の 意 、 1968 を の の こ の こ い つ ぽ う、 1968 を の こ の こ い つ ぽ う、 1968 を の こ の こ い つ ぽ う、 い つ ぽ う 、 1968 を の の こ の こ い つ に う 、 1967 で の の こ の こ い つ に つ こ い つ に つ こ こ の こ こ の こ こ の こ こ の こ の こ こ の の こ の こ つ に つ こ の こ つ に つ こ の の こ の こ の の こ つ こ の の こ の こ の の こ の の こ の こ | はならない。 「いのち」の現 ・ケイパビリティ この異能して にののち」の現 ・ のち」の のち」の の の の の に いのち」の の の し い の た の ち に い の ち で 、 の て 代 に り こ で 運 能 性 の 日 本 こ た 。 都 市 の 問 農 業 中 た 。 都 市 の 問 農 業 に た の 都 市 の 問 農 業 に た の る 都 市 の 問 思 業 に た の る 都 た の の れ 市 の 問 農 業 に の た の 。 都 た の の 間 思 業 に の た の る 都 た の の た の 。 都 た の の た の で の た の 。 都 た の の た の た の た の の た の た の の た の た の た の た の た の た の た の た の た の た の た の た の た の た 、 た で の た 、 た 、 た の た の た 、 た 微 に い な い が ん た 、 た 他 に の の た の た 、 た 他 に の た の た の た の た 、 た 巻 他 に い の た の た 、 た の た の た の た 、 た の の た の た の た の た の た の た の た の た の た の た の で の た し 、 そ の で の で の た し の た の た の た の た し た の た し の か た し た の た の た の た の た の た の た の し の い ら い ら い ら い ら い ら い ら い ら い ら い ら い ら い う い ら い ら い ら い ら い ら の い ら の い ら い ら の ら の ら の ら の ら の ら の ら の ら の の の の の の の の の の の の の の | 場でとまどう 一」に着目した。それは、思想 動を現代的課題のなかで結 こた。 では、高度経済成長のひずみ こ関しては、1968年に都市計 基本法、1966年に始まる三」 詳細に検討すれば、事態は複 感こそがそうした動きをもた the rapid economic growth p こ際して、与野党問わず、都可 さの一端を示した。 | 論講義』(岩波書 ま ま ま た しての、都市 の しての、都市 国 よ が 制 た た れ り 3 で い う で れ に は 、 193 で し て の 、 都市 し て の 、 都市 こ た い う う 雑 に 入 り 組 ん で さ れ 、 れ 市 こ と い う う 雑 た れ た れ に 、 の 、 都市 こ た れ に 、 の 、 都市 こ た い う う 雑 た い う う 雑 に い う う 雑 た れ こ た い う う 雑 に い う う 雑 た い う う 雑 に い う う 雑 に い う う 雑 に い う う 雑 に い う 言 さ れ に 、 の 組 ん で ら し た 主 国 と い う 言 雑 に ろ り 組 ん で ら し た 主 因 と と い う 言 着 た で う に 、 ち に こ ち し た ま こ ち ら し た こ こ ち に こ ち に 、 、 、 、 、 、 、 の う に 、 ち た こ こ ち こ た こ こ ち こ た こ こ ち こ た こ こ ち こ た こ こ ち こ ち こ た こ ち こ た こ ち こ ち こ ち こ ち こ ち こ ち こ ち こ ち こ ち こ ち こ ち ち い う こ 、 つ う う う い 、 、 う う い で う う う い う う し た ち こ ち ち し て う う ち つ う う う し た つ う う う ち し つ う う う う つ う う ち つ う う ち つ う う う つ う う つ う う う つ う つ う う う つ う う う つ う つ う う こ つ う う う つ う う つ う つ う つ う つ う つ う つ う つ こ つ う つ つ つ う つ う つ つ う つ う つ つ つ つ つ つ つ つ つ つ つ つ つ | がある。しかし、これを指弾した ()では、終末期医療の現場 0年代のフッサールやホワイト につながる。このような視点か 問題や公害問題への関心が 調題や公害問題・の関心が につながる。このような視点か 問題や公害問題・の関心が につながる。このような につながる。このような につながる。このような でした。 してきたが、 長谷川は、 、 The a closer look', Urban History (りも、宅地供給のカギを握る、) 題を総合的、構造的に捉える~ | での「オープン・ ヘッドらの近代 ら、思想分野 高まり、国家は 二 二 三 志が一つの 編 り 市 花 者 権 者 の 票 を の 国 取 選 派 の 国 取 選 派 の 国 家 は 二 で の に の に の に の に の に の に の に の に の に の | ・ダイアロ・ 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 | ーす老 こをはしないし |
| | | | | | | | |
| | | | 成果実績の概 | | | | |
| many places ov the two signific | ver the world, h cant events tha | eralding the emergence of ab | andoned people uncement of the | pry; a wave of protest movem as the underside of prosperity e decision criterion of brain de | /. Our project | has focus | sed o |

The above-mentioned decision criterion of brain death was actually fabricated to enable organ transplantation. The 'right of selfdetermination' to justify brain death and the 'right of a patient' resulting from reflection on the wartime Nazi medical science and practices were used to establish the 'right of self-determined death'. 'Euthanasia and dignified death', based on this right of selfdetermined death, has been distorted to justify social selection of a 'life unworthy of life'. However, mere condemnation of this distortion would lead to no solution of the problem of euthanasia and dignified death.

Recognizing this, Takakusagi, in his edited volume, examined practices in terminal care, such as 'open dialogue' and 'negative capability'. From the perspectives of the history of social thought, the volume, through the examination of this grave current issue, presented a renewed contextualization of the criticisms of modern science forwarded in the 1930s by thinkers such as Edmund Husserl and Alfred North Whitehead and the protest movements in the 1960s. It then underscored the significance and potential of establishing a 'gerontology' in the academic field of social thought.

In the 1960s Japan, urban and pollution problems attracted considerable attention and the State was forced to take measures. Following the enactment of the City Planning Law in 1968, urban policy became a prominent issue in that year's House of Councillors election. The City Planning Law should certainly be regarded as a nodal point against the backdrop of the Agricultural Basic Law enacted in 1961 and the outbreak of Sanrizuka Struggle in 1966. However, a detailed examination would present rather complicated state of affairs. Scholars have regarded the ruling conservative party's fear of a threat to its hegemony as the primary force driving this increased attention to urban policy. Hasegawa, in his article, examined the political factors surrounding the reforms enacted, concluding that politicians actually underestimated the degree of public interest in urban policy and made largely empty political gestures to appease urban dwellers while responding more readily to agricultural interests.

We intend to continue our quest for a comprehensive understanding of the two currents of problems in the postwar world; the medical and bioethical problems on the one hand and the urban and pollution problems on the other.

| 3. 本研究課題に関する発表 | | | | | | | | |
|-------------------|---|------------------------|--------------------------|--|--|--|--|--|
| 発表者氏名 (著者・講演者) | 発表課題名 (著書名・演題) | 発表学術誌名 (著書発行所・講演学会) | 学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月) | | | | | |
| 高草木光一 | 「いのち」の現場でとまどう――臨 床医学概論講義 | 岩波書店 | 2019 年 6 月 | | | | | |
| 高草木光一 | 安楽死・尊厳死問題を考える | 現代の死生問題を考えるネットワ 一ク | 2019 年 12 月 | | | | | |
| Junichi Hasegawa | The political motivations for the reform of urban policy during the rapid economic growth period in Japan: a closer look | Urban History | December 2019 | | | | | |